

東京バッハ合唱団 月報

[第 735 号] 2023 年 9 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101

Tel: 03-3290-5731 Fax 専用: 03-3290-5732 郵便振替: 00190-3-47604

Mail: office@bachchor-tokyo.jp http://bachchor-tokyo.jp

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No.735

September 2023

5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

私の「神」信仰

大村 恵美子（主宰者）

森井眞氏が天寿を全うされて、先月、地球から連れ去られました。

私は、専ら「キリスト教信仰」を植えこんでいただいた大切な恩人として、そのご逝去を悼みながら、いま、私自身の「キリスト教」を含む、もっと広範囲な「神」信仰を公開してから、いずれは自分も死んでゆきたいと願い、辞世的なご挨拶を思い立ったのです。

日本キリスト教団など、信仰共同体の経営する出版社からの発行物としてではなく、何でもないただの個人の、一般人へ向けての、先立つ感想文として、本心をお伝えしようと考えたものです。

読んでくださった既知の方々、あるいはたまたま読む機会があって目で追ってみた、全く私を知らない方々が、一笑に付してそれまでとなるか、何らかの意味で世に伝えてみようとしてくださるのか、全く分かりませんので、自分自身のために、まずとにかく原稿を書くことにし、夫として共に歩んでくれている大村健二に渡して、将来をゆだねることにいたします。どうぞよろしく。

キリスト教との出会い

私は、浄土仏教徒の両親から、日本社会のしきたりを普通に納得している一家庭の次女として、兵庫県西宮で生まれました [昭和 6 年、1931 年]。長男・長女の次の 3 番目の、ごく健康な人間で生まれたのです。家族はまず順調に生活をしていて、父は、当時の友人・先輩方の勧めで、これも出来たばかりの、希望を大きく託されつつあった満州に、移住しました。

何の伝手（つて）もない若者だった父も、皆さんから好かれて、若いながら期待にそえるよう、役員方の住む個人の家でなく、一般銀行員のひとりとして、なかなか住み心地のよい何階建てかの満州中央銀行の住宅 1 階に、首都・新京の中央で、以後、たのしく生活するようになりました。

ところが、そこで 40 歳の父は、胃癌であつという間に死去。母は、もう 1 人生まれていた妹（三女）を含め 4 人となった子らをひきいて、日本の東京に移住することとし、母が若い頃に短期間住んだことのある吉祥寺（中央線沿線）に、母 1、子 4 の 5 人家族で、暮らしました。その後、兄も、一兵卒よりも楽だという少尉となって兵役を終え、敗戦後も収入をまずまずの程度に得、母も東京都庁で、生まれついた時から自

森井 眞 先生、ご逝去

東京バッハ合唱団団友、森井眞先生が 8 月 10 日、満 103 歳のご長寿を全うされました。ご遺族の方々には謹んで哀悼の意をお伝え申し上げます。

森井先生は、合唱団の創立当初、ご自宅 2 階を練習場として開放し、自らも団員のお一人として楽しみ、また月報紙上などで多くの論考を著して団員を導くなど、後の半世紀余の発展の礎を築いてくださいました。改めまして、団員一同、心よりの感謝を申し上げます。

1967 年から明治学院大学教授、82 年から 90 年まで学長を務められました。歴史家。著書に「ジャン・カルヴァン ある運命」（2005 年、教文館）など。

2018 年 10 月、私学会館にて、ゼミ卒業生と合唱団の主催で「森井眞先生 白寿のお祝い会」を開きました。

由な英語を用いて収入を得て、4 人の子たちの教育に力を注いでくれました。

さて、「キリスト教」ですが、母は、両親が仏教徒なので、大半の日本人と同様に、月 1 回お坊さんをお招きして、胃癌で早逝した夫（私達の父）の供養をする程度、仏教に関わっていました。

戦後の東京の一般人は、何でもアメリカ風のハイカラな生活に憧れ、仏教よりもオープンな感じの「キリスト教」に、新しい関心を寄せました。私も、まわりの知人・友人たちの影響もあって、教会で洗礼を受け、キリスト教徒の一員となりました。それまでは関心のもてるような仏教の教科書も知らず、明るいキリスト教会の「聖書」や豊富な著書に恵まれて、キリスト教にはごく自然に入ってゆけました。大学に入るときには、私の高校時代の師であった森井氏と結婚していて、フランス宗教改革史の研究者としての彼から、深い感化を得たことは言うまでもありません。

キリスト教の枠を越えて

それでも、「キリスト教」への批判も、抜けることはなかった。一番気になるのは、「神」が、人間を愛してより近づけるように、「イエス」という神の子を、人間社会の中に送り、そして無残な刑の形で殺させてし

月報 2023 年 9 月号 CONTENTS

- ・随想「楠正成・正行、別れの歌」（大村恵美子）…p.2
- ・楽譜完結計画、準備はどこまで進んだ？（編集部）p.3
- ・連載：退屈するのはいそがしい [31]（大野博人）p.4



■シクラメン原種（撮影：千葉光雄、2022/10/22）

まう。感情的には、多くを説得できる成りゆきではあるのですが、私には、ここがつかずきでした。「神の子」がそこいらにワサワサと居る人間どもから殺されるなんて！……

私の中では、「神」は、あくまでも神で、人間となったりするような存在ではなく、人間を含めた、地球上のすべての動物（小さなアリなども含め）の造り主なのです。地球そのものも、動物を生かすに必要な空気や水なども、食用になるようなものも、みんな神が人間に造ってくれたものです。だから、私にとっては、「神の子」が人間となって出てくる筋書きも不要。私たち人間が、「神様ありがとう」とお礼を言うのもピンとはずれ（最近多発している山火事や洪水などを、神様はどうされるのでしょうか？）。

私たち人類にとっては、他の動物・植物、空気・水・土地・海などすべてと同様に、もう「神」というものは不可解でしかない。「世界」も、やはり、人間にわかり易い説明で納得するだけのもの、というのが結論のようです。

人間がいくら人間に向かって説明しても、無駄でしかない。ただ実際に生きている現状をよろこんで、自らもそれに乗って、みんなで生きられる間、楽しんでエンジョイしようと、素直に生きれば、それですべてなのではないでしょうか。

自死を意欲するとは

地球では、いろいろな存在にかこまれて、ワクワクとして、死ぬまで生きる、死後の自分は自覚できないのだから「わからない」と認めて、無理のない範囲で充実させて生きるだけ。

その上に、人間側の意欲が加わると、どうなるのか？「自死（自殺）」を、意欲して行うのは、どう考えるべきか？

私自身は、楽道家で、「もう死にたい」と思ったことはありません。法律が禁じようが許そうが、死に向かおうとする人を知ったら、やはり止めなければならぬ。また自死（殺）をやり遂げてしまった人の家族に声をかけようとしても、何と書いていいかわからない。でも、接するとき、よそよそしく黙っているのはご遺族にとっては悲しいことでしょうか、逃げずにあたたかい目で、自然な形で接しなければ、と思います。

実は、外へ向かって発言したことは、これまで一度もありませんでしたが、私自身も自死者の家族でした。先に書いた兄、やさしくて陽気な兄でしたが、彼が肉体の苦痛・人生の困難などから逃れて、自ら天国へ急いでしまいました。もう何十年も昔のことですが、どう慰め、あるいは慰められるのか、難しい日々が過ぎました。当時を思いながら書いています。

死後は天国のみ

最近私は、みんなに、死後は天国に迎えられないことしかない、とよく語っています。「地獄」に入れられて、ずっといびられ続けるなんてことはない、「地獄」というなら、人生の中で、互いに憎みあって喧嘩をしたり、他国と戦争をして激しく殺し合ったりすることなどこそ、「地獄」の実体そのものです。私は、最も禁じるべき行為は、人を殺害することで、どんなに死んでも死にそうな人を必ず生きられるよう助けることが、人間の義務だと考えます。

今は、そのことを多くの人々に訴えたくて、書いたようなものでした。皆さんのお考えも、うかがえればさいわいです。[了]

楠正成(まさしげ)・正行(まさつら)、別れの歌

大村 恵美子

ナンとまあ、古い歌を?!

と、異様に思われる方が多いと思いますが、この歌を“発見”したのがやっと最近だったので、とにかくお付き合いいただければうれしいです。

私が「お父さん子」だった話は、これまでも何度か書いた記憶があります。今でも、その象徴的なシーンとして先ず浮かぶのは、父が幼い私を、うしろから両手で抱き込んで、分厚いオーバーでくるんでいた時の感覚です。その優しい父は、早くも40歳で胃癌となり、発見後1カ月で早々とこの世を去りましたが、立っている私をうしろから前に抱いて、口ずさんでいたのが、「青葉しげれる桜井の……」という、楠正成を歌った唱歌でした。

私は不覚にも、つい最近まで、その内容も知らないでいたのですが、偶然、過去の楽譜の束の整理をしているときに、この歌「桜井訣別」（さくらのわかれ）の旋律だけの楽譜が出てきましたので、ここにご紹介しておきます（右ページ）。



楽譜完結計画、準備はどこまで進んだ？

編集部

以前にご紹介した、日本語歌詞付きブライトコプフ版カンタータ楽譜全集の完結計画（「楽譜完結計画」）はその後どうなっているのか、気にかかっている方もいらっしゃるかもしれません。コロナ禍の影響をこうむったこの数年は、公演予定その他がつつぎと中止または企画変更となり、事務局としても対応に追われて、ご推察のとおり、大幅に遅れています。

が、遅れが幸いし、幸運にも恵まれました。

◆楽譜完結計画に至る前史

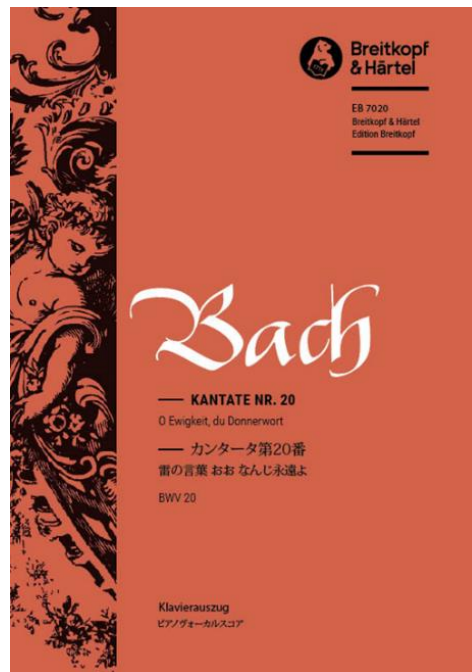
バッハ記念年（歿後 250 年）の 2000 年、ドイツのブライトコプフ社の著作権使用許可を得て同社ボーカルスコア全集（Edition Breitkopf EB7000 シリーズ）を底本に、よく知られた教会カンタータ 50 曲を選んで、大村恵美子の訳詞を付した「日本語版『バッハ・カンタータ 50 曲選』」の刊行を開始し、年に 10 曲ずつを上梓して、2004 年、50 曲を完結しました。

その後も、公演スケジュールに沿って、同シリーズから訳詞付き楽譜の出版をつづけており、当団での使

■計画第 1 期から使用される表紙の新デザイン（今後の原版シリーズと同装丁）。

ブライトコプフ社では、増刷のつど、この表紙に置き換えてゆく方針だが、われわれの計画においては、開始早々からの使用が勧められた。格別の待遇！

右掲サンプルは、2024 年刊行予定の BWV 20 《雷の言葉 おおなんじ永遠よ》。これまでの日本語版楽譜と同じ A4 判。ドイツ語原版はやや小型（19 cm×27 cm）。



用にとどまらず、市販のルートも設けて、細々ながらバッハ日本語演奏の普及に便宜を提供しています。

この間、昨年には社長みずからのメッセージもいただきました：「バッハの作品の言葉と音には、慰めをもたらし、人をひろく包み込む力があります。それが、あなたの方の手によって、かくも見事に日本語に移され、それによって一層広範な人々のもとに届けられようようになりました。ブライトコプフ&ヘルテル社は、そのことに誇りと喜びを感じております……」。これは、月報読者のみなさまにも訳出してお伝えした通りです（2022 年新年号「月報」第 715 号）。

◆計画第 1 期の組み直しと現在地

EB7000 シリーズは、現在 200 曲ほどが刊行されていますが、これらのうちバッハ真作の教会カンタータは（分類の仕方により数は異なりますが）192 曲で、上記のとおり、われわれは既に 82 曲を訳詞出版しました。残る 110 余曲を完結させようとするのが当計画であり、60 周年記念企画の一環として発表したもの。

当初は、計画第 1 年次に BWV 2、3、5、7、9、10、11、12、13、18、20、22 の 12 曲を掲げていましたが、ご存じのとおり、BWV 11、12、20 の 3 曲は、本年 5 月の定期公演（#122）での使用のため先行出版を終え、残りの 9 曲も版下は校了している状態です。

そこへ本年 3 月、先方から新しい表紙デザインの提案（上掲）があり、今後、ドイツと日本とで統一した表紙の楽譜を出しましょう、とのメッセージが添えられていました。「遅れが幸いし……」と、冒頭に記したのはこのことです。しかも、当計画のスタートから新デザインによる発行が許されました。

遅れついでに、第 1 年次残りの 9 曲に、当初の第 2 年次予定 12 曲のうち 9 曲（BWV 23、24、25、27、31、32、33、34、35）を先行させて、見直し後第 1 期は合計 18 曲とする案を容れいただき、2024 年の計画スタートは、日本語版楽譜の全「100 冊」刊行記念と銘打つことともなります。ご期待ください。

青葉茂れる桜井の

©コロムビア 曲
落合直文 作詞
奥山朝恭 作曲

その楽譜は何度かのコピーを経たもので、挿し絵は黒ぐると不鮮明だったのを、見やすいものをネットで探してもらいました（着色の挿画）。

実際には、昔、父の歌った旋律は、長調ではなく短調だったので、夕闇の中で聞いたときは、しんみりと物悲しく響いたものでしたが……。

1.

青葉茂れる桜井の 里のわたりの夕まぐれ
木(こ)の下陰に駒とめて
世の行く末をつくづくと
忍ぶ鎧(よろい)の袖の上(え)に
散るは涙かはた露か

2.

正成(まさしげ)涙を打ち払い
我が子正行(まさつら)呼び寄せて
父は兵庫に赴かん 彼方の浦にて討ち死にせん
汝(いまし)はここまで来つれども
とくとく帰れ故郷へ

(以下、15 番まであり)

<連載随想>

退屈するのはいそがしい [31]

何用あって夏のパリに？



安曇野閑人 大野 博人

議員の先生たちは、いったいなんの用があって夏のパリに出かけるのだろうか。

パリに「研修」に行ったはずの自民党の国会議員や地方議員が、観光気分の写真を公開して物議を醸した。「けしからん」という怒りから、「研修の合間の息抜きの写真くらいで目くじら立てなくても」といった擁護、はたまた「そんな写真をネットに出す方も、騒ぐ方も馬鹿だ」と、政治家も批判者もまとめて嘲笑する意見まで、さまざまな声がメディアをにぎわした。

けれど、批判も擁護も上から目線もちょっと焦点がずれているように見える。

そもそも、この時期のフランスはみんな夏休み中である。友人の多くも地方や外国に休暇に出かけて3、4週間パリを留守にしていた。夏のパリは空っぽ。見かけるのは観光客とホテルやレストラン業界の人たちばかりではないかと思うくらい。

もちろん大臣も議員も官僚も記者もいなくなる。夏にパリでテロ事件があっても担当大臣が休暇先からもどって来なかったのに驚いたことがある。新聞や雑誌もぐっとページが減る。休暇を仕事より神聖視するフランス。夏のパリはそんなうらやむべき価値観を象徴している。

つまり日本の政治家が、限られた滞在日数で多くのキーパーソンたちと効率よく会って勉強するには、もっとも不適切な季節である。パリで「研修」をまじめにしていたかどうか以前に、この時期に行くこと自体が、すでにとんちんかんである。

だから批判を浴びた女性議員たちの弁護をする気はさらさらしない。ただ、夏のパリでの議員「研修」という

意味不明のイベントは、彼女たちのケースに限ったことではない。

20年あまり前の夏のある日、大使館の広報担当者からパリ支局に電話があった。「日本から視察に

「日本から視察に

■外国人観光客に大人気の渋谷のスクランブル交差点。スクランブル交差点なら安曇野の穂高駅前にもあるんだけどなあ。

(写真：筆者の長女撮影、説明筆者)



来る国会議員の先生たちとの、最近のフランス事情についての懇談会に出てくれませんか」

「日本人記者と話す暇があったらフランスの政治家本人たちとなるべくたくさん会った方がいいのでは？」

「それが、フランスの政治家はほとんどが夏のバカンスに出かけていてパリにいません。会える人が少なく『視察』の日程が埋まらないんですよ」

というわけで、パリに残っていた日本人記者たちが穴埋めの懇談会に出向いた。すると視察団の一人が憤慨している。

「夏休みだからと言って、だれもかれもパリから離れて長い休暇をとるなんておかしい。フランス人はノブレス・オブリージュ（高い地位に就く者の責務）という言葉を知らないんですか」

「それはフランス語なので、フランス人はみんな知ってますけど……」

やれやれ。自分はノブレス・オブリージュのつもりで夏のパリに来たのかしら。話す相手もないパリに。

夏に限らない。あるとき、国際会議で訪欧した日本の大臣がなぜかパリに立ち寄った。フランスの大臣と意見を交わすためという。彼の管轄分野に日仏間で懸案はなかったはず、とっていたら、会談後に記者会見するという。で、大使館へ。

集まった日本人特派員を前に、大臣は「今日、こちらの大臣と意見交換をしました」と切り出したとたん、とりに控えていた同行の官僚にこう言い放った。

「君い、今日会ったあの大臣、名前なんていったっけ？」

大臣の御託など聞く気が失せた。メモをとるのもやめた。ほかの記者たちも同じだったと思う。大した見解もない大臣のために会談を設定しなければならなかった大使館員たちも切なかつただろう。記者生活40年で、もっとも馬鹿馬鹿しい記者会見だった。

与党でも野党でも男でも女でも政治家がパリに来る目的はたいていかなりあやしかった。

フランスに見るべきものがないわけではない。むしろたくさんある。移民、少子化、環境、教育、安全保障、民主主義……。どんな課題に直面し、どんな政策を試みているか、それは成功しているか失敗したのか。本気で意見交換すれば、大いに参考になるはずだ。ただ、そのためには、当事者とじっくり話し、現場をしっかり視察しなければ。夏のパリでそれはできない。

どうしても夏に国外に出かけるのなら、バカンスとは無縁で深刻な事態が進行中の現場を見に行けばいい。ウクライナでも、ミャンマーでも。だが、そんなところには行く気がないんだろうな。

さて、コロナ禍が下火になったとたん日本を訪れる外国人旅行者が急増しているという。松本や安曇野でもよく見かける。議員たちが会った方がいい人たちは、むしろ日本の夏の観光地にたくさんいるかも。

(団友・後援会員、元朝日新聞記者)